



遠
2378
201

東里山人作
勝川春扇画

前編卷

溥雲佐宇紙

己卯春

耳泉堂梓

耳泉堂

大智度論だいちどろん曰い設しやう世界せかいの満まん室しやうも。何なん命めい不ふ直ちやく教きやうと有あと存ぞんす。ト
釋しやく尊そん悟ごて。佛ぶつ店てんの鱧らん屋やの。三さん舖ぽをを開ひらき。五ご百ひやく羅ら漢かんの尊そん者しや達たつ
拂ふ子しをを投なげ。鮮せん螺ら堂だうをを建た立たせ。觀くわん音おんの鯉りをを提たげ。三さん田てん山さん小せう
現げん顯げん藥やく師しハ蜻せうをを好このんで。目め黒くろ名な高かう。一いつ切きやく々々厄やくの空くう不ふ止しる。口くちの
先せん猛まう火かよりも甚じんし。方はう便べん經きやうハ設しやう。素そよりも虚こをを机き小せう崎せきをを煩わん惱のうの
硯えん燭じやく病びやうの葦あし紙しをを貫くわんす。因いん果くわ應おう報ほうの理りをを述しゆて。臨りん命めい終しゆう時じ
不ふ隨ずい者しやの不ふ解かいをを示しす。全ぜん龍りゆう六りく州しゆうの花はな溥ぽ雲うんをを題だいせ。諸しよ行ぎやう
無む常じやうの風ふう不ふ散さん。是ぜ生じやう滅めつ法ぽうと。消しやうてて行ぎやう跡あとはは夏かの諸しよをを哉や
と。

己卯春跋取

東里山人誌



○角田家の
春若丸

○梅柳
階子の
右
意味



○角田の
末女
花咲娘

○角田家の
系圖
都鳥の
春若丸



○延宝
二年
霜月朝日
山村
長太夫
座
薄雲
狂言繪
草紙
圖

鬼がまのき

まの
あらの
まの



鬼がまのき

まの

まの





花咲姫の侍女

陽炎

林間燂酒

焼紅葉

かゝ散りて

かゝ静まる

紅葉哉

素丸

存く山

ささけ時雨の

鉢紅葉

九陽

宮戸川明神の稔

文久間の破魔也

くすね

ら





薄雲
東里山人作
勝川春扇画
己卯春



泉市
行



一、此の衣は、
 二、此の衣は、
 三、此の衣は、
 四、此の衣は、
 五、此の衣は、
 六、此の衣は、
 七、此の衣は、
 八、此の衣は、
 九、此の衣は、
 十、此の衣は、

一、此の衣は、
 二、此の衣は、
 三、此の衣は、
 四、此の衣は、
 五、此の衣は、
 六、此の衣は、
 七、此の衣は、
 八、此の衣は、
 九、此の衣は、
 十、此の衣は、



一、此の衣は、
 二、此の衣は、
 三、此の衣は、
 四、此の衣は、
 五、此の衣は、
 六、此の衣は、
 七、此の衣は、
 八、此の衣は、
 九、此の衣は、
 十、此の衣は、

一、此の衣は、
 二、此の衣は、
 三、此の衣は、
 四、此の衣は、
 五、此の衣は、
 六、此の衣は、
 七、此の衣は、
 八、此の衣は、
 九、此の衣は、
 十、此の衣は、

移の女...
 二...
 三...
 四...
 五...
 六...
 七...
 八...
 九...
 十...
 十一...
 十二...
 十三...
 十四...
 十五...
 十六...
 十七...
 十八...
 十九...
 二十...



一...
 二...
 三...
 四...
 五...
 六...
 七...
 八...
 九...
 十...

一...
 二...
 三...
 四...
 五...
 六...
 七...
 八...
 九...
 十...
 十一...
 十二...
 十三...
 十四...
 十五...
 十六...
 十七...
 十八...
 十九...
 二十...



一...
 二...
 三...
 四...
 五...
 六...
 七...
 八...
 九...
 十...

かゝるに...

たせ

かゝるところに後室さまの御のたまひ
かひてさうりやうとたのたまはる
鬼がぬりの進まおのり
たちまちうり忠とありて
こゝろをさしあひ

かゝることをぐく
あやうが
若君
夾まろ丸不
たひめん
出羽の
つが
あきま
まめく



若君の女とまをてん
やア〜日ごろおぼろのま
おのりぬりのふらまひ
さてもきこまきたぬ
こちこちの言ひあはる
思願のちんちん

忠

